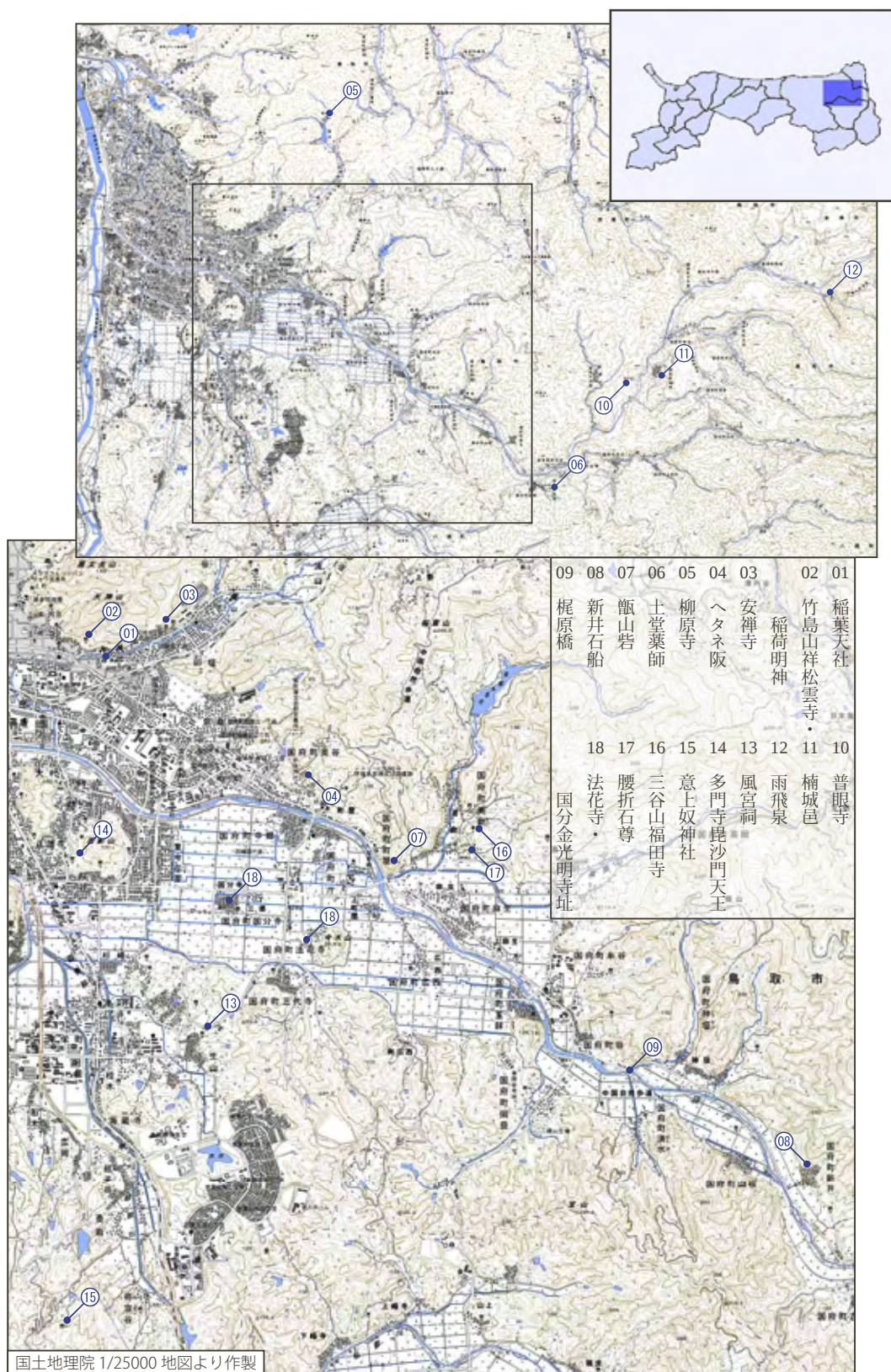


『稲葉
佳景
無駄
安留記』

調査報告

(法美郡篇)





稲葉天神

稲葉天神は現在の稲葉神社で、鳥取県立川町に位置する。『鳥取県神社誌』を見てみると、稲葉天神の設立年月日は不明、弘化四年（一八四七）に台風で社殿倒壊、同年鳥取藩主の池田慶行により寄進再興された。池田慶行は十代目鳥取藩主で、物価規制や在方商業の制限などの政策を行った人物であり、十七歳という若さで亡くなっている（『特別展 鳥取藩32万石 図録』鳥取県立博物館）。それから、稲葉天神は昭和二年（一九二七）

に再び社殿改築されている。

無駄安留記によると、稲葉天神の祭神は倉魂である。『因幡志』では、倉魂は倉稲魂と記されており、そのため倉魂は倉稲魂の略称だと思われる。倉稲魂は稲の神霊で、ウカはウケに通じて食を意味し、食物のことに功があると書かれている（『神道大辞典』）。

無駄安留記では稲葉天神について次の記述がある。

武内大臣三韓征の御旗を収めたまふと也。かみさびたるさまいとたふとし。老松茂りて寂寥として閑静なり。秋風紅葉散すもむかしのおもひにて。

現代語に訳すと以下のようなになる。

（稲葉天神は）武内大臣の三韓征伐の御旗をお収めになっているということだ。神々しい様子はとても尊い。古い松の木は茂り、寂寥としていて閑静である。秋風が紅葉を散らすにつけても、昔の様子がしのばれる。

武内大臣とは、大和朝廷の初期に活躍したと言われる伝承上の人物、





武内宿禰のことである。彼は百三十一歳の時、神功皇后の命に従い、新羅、百濟、高句麗の三韓征伐を行ったと伝えられている。また『因幡国風土記』（日本古典文学大系『風土記』「逸文」の部）によれば、

因幡の国の風土記に云はく、難波の高津宮（仁徳天皇）に天下を治しめしし五十五年春三月、大臣武内宿禰、御歳三百六十余歳にして、当国に御下向あり。亀金に双つの履を残して、御陰所知れず。

とあり、武内宿禰は三百六十歳のころに因幡国へ下向したことになる。『因幡伝説民話第四集』には、武内大臣の旗と因幡に関連した記載がある。武内大臣は因幡国に下向した際、「幡に因りて悪徒を平定し給ひければ、それより稲葉を因幡と改められし」という逸話である。これによれば、武内大臣の旗から因幡の表記が生まれたことになる。

しかし、無駄安留記の文章通り、実際に武内大臣の御旗が稲葉天社に収められていたという陳述が事実なのかは不明である。次に、稲葉天社の狂歌を見てみる。

秋風に木々の錦をなびかせて
今も御旗の色を見せ唄

「木々の錦」とは、和歌では紅葉を表す。また、無駄安留記の記述の「秋風紅葉を散す」より、紅葉を指していると判断できる。そして、錦という比喻を用いることで、豪華壮麗で錦の御旗を連想させる紅葉の様子を表現している。この歌から、稲葉天社には今でも武内大臣の栄華の名残が感じられるという著者の心中を読み取れるだろう。

（西住 彩）

竹島山松雲寺・稲荷明神

稲荷明神（稲荷神社）は鳥取市立川四丁目にある神社である。祭神は保食神と菅原道真である。現在の稲荷明神の鎮座地はもともと竹島神社という神社の社地であったが、大正一〇年（一九二一年）に南方にあった稲荷神社が現在地に移転して北野神社を合祀した。

その竹島天神は菅原道真を祭る天神だが、勧請の時期は不明とされている。『鳥府志』によるともともと竹島神社は立川村内に祭られていたが、永禄年間（一五五八～一五六九）に戦火にあい、その後現在の場所に移転したとある。無駄安留記には移転後の現在の場所が記載されている。以上を踏まえて無駄安留記を調査すると、無駄安留記には合祀される以前の竹島天満と稲荷神社が別々で表記されている。まずは竹島神社の本文を見てみたい。

竹島山松雲寺。祭神 天満宮。社頭、梅・泉水・金魚面白し。縁起は拾遺に審なり。

人ならば罪にあつらむ神垣の

梅の香ぬすむ夜の山風

「天満宮」とは菅原道真を祭った神社を指す。また無駄安留記には紹介する場所によって筆者が歌を詠んでいる場合が多い。それは景観を歌ったものであったり、祭神や神社の由来などを歌ったものが多い。こ

の竹島神社でも右のような狂歌を詠んでいる。まず直訳すると、「人であれば罪に罰せられるであろう神垣の梅の花の香りを盗んでいく夜の山風であるなあ」といった様になるだろう。梅の花というのは菅原道真が愛でた花である。実際、菅原道真が大宰府に流される直前、京都の家を離れるときに「こち吹かば匂ひおこせよ梅の花 主なしとて春を忘るな」（『拾遺集』雑春）という歌を詠んでいる。作者はこの事実を知った上でこのような歌を詠んだのであろう。また、菅原道真を祭った天満宮には梅の花をモチーフにした神紋があるが、現在の稲荷明神にもこの神紋がある。

次に稲荷明神をみてみたい。無駄安留記には、「稲荷明神 石磴高く秀たる社頭なり」とある。石



稲荷社



竹島山天満宮

礎には石段、石橋、石垣という意味があるが、この絵を参照するとおそらく高くそびえた石段を指しているのではないだろうか。

現在、稲荷神社は先に述べたとおり竹島神社に合祀され今はその姿はない。しかし、昔の地図を見てみると現在の稲荷明神の隣に神社があった形跡がみられた。実際にそこに行ってみると土蔵と小さな祠が祀ってあった。祠には稲荷の形跡は見つけられなかったが、土蔵の瓦に稲荷明神の神紋に見られた三つ巴の神紋が見受けられた。周辺の人に聞き取りをしたが、これが旧稲荷神社であるという証言は得られなかった。

次に無駄安留記の狂歌には「如月やいなり祭りも今こんと ないてよろこぶ子狐の声」とある。歌に詠まれている「いなり祭り」とは二月の初午はつごまの日の稲荷の祭である。この歌はまず「如月や」と稲荷の祭のある二月を冒頭で強調し、つづいて「いなり祭り」の時期を迎えるという意味の「来ん」と稲荷明神の使いである狐の鳴き声の「こん」をかけて表現している。さらに結びの第五句で「子狐の声」と念押しした、非常にわかりやすい歌となっている。

以上が無駄安留記から読み取れる稲荷明神および竹島山松雲寺の情報である。では現在と比較するとどうなるのであろうか。

まず、無駄安留記では合祀される以前であった、また合祀後の改築・改装以前であったために、図は昔の姿であり現在とは似て非なるものと考えてよいだろう。



現在の社殿の外見であるが、もともと

菅原道真を祭っていた竹島天満宮の様相を残しつつも、稲荷明神を合祀したために、一部の手すりは稲荷神社に特有の朱色に塗られており、狐をかたどった置物が各場所に設置されている。保食神との合祀の理由だが、昔から穀物の豊作を祈るとき、もしくは飢饉に見舞われたときは穀物の神を神社に招いて合祀するということがしばしばあったらしい。全国的に見ても多くの神社に保食神が合祀されていることを見てもさほど珍しい現象ではないようである。

現在の稲荷明神の姿と竹島天満宮の姿はほとんど同じであり、今も昔も変わらない姿で参拝客を迎えてくれる。また古くからその土地に根付く神社に特有の雰囲気があり、作者が「面白し」と表現した景観が現在でも感じることが出来る。

(進藤 健裕)





安禅寺

無駄安留記には、

遊行上人を案内する寺なり。門前並松を植。鐘楼夕陽に赫々として
美麗の梵なり。

是遊行上人導の寺。門前並松蒼々赤鐘楼堂宇壯嚴尤美也。常念仏な
り。大鉦を打て市中を修行する。

とある。この記述から安禅寺の前は松が生い茂っており、夕陽に照らされた鐘楼が美しく、たいへん見栄えのする寺であったことが読み取れる。また、安禅寺は遊行上人を案内する寺であったようだ。遊行上人は時宗を宗派とするので、安禅寺は時宗の寺と思われるが、『鳥取県の地名』によると臨済宗妙心寺派であるという。無駄安留記の記述から読み取れることと、『鳥取県の地名』に記述されている内容に違いが見られ、寺の宗派は不明のままである。

また、『鳥取県の地名』には安禅寺の詳しい記述があった。この寺は、享保十五年大隣寺熊山の願いによって建立されたものであるという。そしてのちには、妙心寺直末となり津田周防家の位牌を安置し、「御免地」でもあることから格が高い寺であり、広い敷地を所有していたことが読み取れる。

『因幡志』には安禅寺についての記述は無かったが、神田橋の説明の中に安禅寺が出ていた。神田橋の説明では「昔法美邑美の通行は今の立川筋に道なく、ここより北の小西谷を本道として大日谷（今東照宮）の谷隘へ山越しけるとぞ。其頃の橋の迹今に安禅寺前の小川にかかれる獨梁を神田橋という」といった記述がされていた。これにより、安禅寺の





前は通行が多かったことが窺える。また、通行が多かっただけでなく、おそらく安禅寺に参詣する人々も多かったのだろう。

現在、安禅寺は無住の寺となっている。すぐ隣には住宅が立ち並んでいたが、寺は物静かであった。無駄安留記中の絵と現在の様子を比べてみると、変わっている部分が多かった。絵には建物が二つ描かれているが、現在は本堂しか残っていないかった。そして、寺の周囲は舗装されていたため、賞賛されていた松や、絵に見られた寺の周りの塀もなくなっ

ていた。鐘楼に関しては、現在鐘は取り外されていたが鐘楼は残っていた。しかし、絵の中では奥の方に描かれているが、現在は敷地の手前辺りにあり、位置が異なっていた。また、絵には描かれていないが、本堂の裏には池があった。石組みのあともあり、ここに庭園があったと思われる。

(安道 詩織)

へタネ阪

へタネ阪は国府町宮下から稲葉山へ入る山口である。『鳥取県の地名』にはへタネ口とある。『国府町誌』によれば、稲葉山は袋川の中・下流域一帯に肥し草・薪を供給する重要な入会地だった。「へタネ」という単語の意味について詳しく書かれた記述は見つからず、当時の地元の人によって、何かの出来事をきっかけにそう呼ばれるようになったのかもしれない。

無駄安留記の本文には「奥在所の人黒木をひさぐに此阪を通れり。是宇倍の山口なり」とある。宇倍とは現在の稲葉山のこと、稲葉山は江戸時代のころ宇倍野山と呼ばれていた。したがって、その意味は「田舎の奥のほうに住んでいる人は黒木を売るためにこの坂を通っている。これが稲葉山の入り口である」となる。「ひさぐ」とは物を売るという意味だ。黒木とは皮の付いたままの木材のことをいう。



宇倍神社の東から樗谿神社へ続く山道

次に、無駄安留記の歌には「赤色の柿のへたねを帰れるは黒木も貌もうれたとぞ見る」とある。第一句の「赤色」は人が酔って顔が赤くなっている様子を表す。熟して赤色になった柿というのは酔って顔が赤い人を連想させる。他に赤色の意味として夕日によって顔が

赤く染まっている様子を表している。第五句の「うれた」は「黒木が売れた」と「貌が熟れた」とい

うふたつの意味に取れる。貌が熟れたとは酔った人の顔の状態を表す。これらより、へタネ阪を帰る赤い顔をした人を見て、「黒木が売れたお金で酒を飲んで帰ってきたのだろうか」と歌ったことがうかがえる。

最後に、無駄安留記の絵を見ると、村人が山から木材を担いで下りる様子が见られる。坂を下っている人の担いだ黒木に注目して見ると、黒木が縦にならんで描かれている。現在では束ねて吊るした薪が天秤から落ちないように、横に並べるのが普通と考えられる。しかし、『農業図絵』（土屋又三郎・農山漁村文化協会）によると享保のころの加賀の国でも縦向きで牛に担がせており、『背負う・担ぐ・かべる』（木下忠（編）・岩崎美術社）のなかでも、天秤に対して縦に結ぶと書かれていた。つまり、この担ぎ方は当時では普通に行われていたことで、無駄安留記の絵は忠実に表現されていると思われる。

現在では道も舗装され山も削られて、絵の場所は正確には分からない。しかし山道は現在でも樗谿神社まで続いているという道案内板が出ており、村人が黒木を売るために山道を登っていった様子は想像できる。道が舗装されていない当時は山を越えるのはとても困難だったはずだ。

（森中 孝佑）



柳原寺

りゅうげんじ

『鳥取県の地名』によると柳原寺跡は、

百谷治水ダム北岸にある。一溪山と号し黄檗宗。近世には鳥取興禪寺末。創建の時期は不明。開山は提宗。寺名は京都から因幡に下向した公家柳原量光夫妻の墓所と伝える五輪塔二基が百谷にあることにちなみ、五輪塔の傍らにある旧寺地は柳原氏の居所の跡とされる。

とある。次に、無駄安留記の本文には、

是安德帝遷幸の時歟柳原大納言量光卿夫婦同弟某卿当村 家に止宿。于時重病ニて夫婦共逝去。墳ハ後山谷ニ在り。後寛永の頃国主光政公の命を受けて紫沙門提宗老和尚寺を再建す。本尊薬師寺観音勢至其外仏像を安ず。又山椒塗の杖あり。額ハ花静至上方結大字月と書。花押ハ木庵瑯印○正榮永昌木庵書。何世の遺跡にや。

石垣高く梵宇美麗なり。弘善寺末。隱居地とするよし。
あまさがるひなにありても錦なり

桃のたになる柳原寺

とある。歌の解釈をしてみると、「都から離れた遠い地方にあっても華やかで美しい、桃が多く実る柳原寺は」という意味になる。また、「桃のたになる柳原寺」という部分は、ここの地名である百谷村にちなんで「百谷にある柳原寺」とも解釈できる。また、柳原寺は「梵宇美麗なり」と紹介されているほか、和歌の中に「錦」という語句が使用されているといった点からして、外観が綺麗であったと読み取れる。

『因幡志』には、柳原寺に関して「昔公家の貴族富國に下り居住し給ひ跡なりといふ寺より三十間ばかり奥の谷東の山下竹林の中に二基の五輪あり。柳原量光卿夫婦の碑碣なり。昔此邊を領知せられけるが時の亂を避けて京都より此地に移り夫婦とも此所にて薨去ありしとなり」と記





述されている。

この二つの資料を比較してみると、どちらの資料にも共通して記述されていることから、柳原寺は公家の柳原量光が居住していた場所に建てられた寺だったと推測できる。

また、『鳥取県の地名』には、「柳原氏に関する以下の説明があった。柳原氏の因幡在国は応仁・文明の乱の頃からとみられ、文明六年（二四七四）には在国しており、天文十三年（一五四四）まで資綱・量光・資定の三代にわたり、京都と因幡の国の間をしばしば往復している。柳原氏は守護山名氏に押領された知行地からの収納を確保しようとしたものと考えられ、百谷付近に権益をもつ所領があったのであろうが、具体的な所領名は不明（『国府町誌』）。『因幡民談記』によれば、資定が三条西実隆所持の連歌新式一本を書写し、さらにそれを大永八年（一二二八）専称寺中寮重阿が書写、さらに弘治二年（一五五六）大日西谷（樗谿か）覽宝方覺榮が書写した写本を池田光仲家臣本内以慎が所持していたという。」とある。

百谷村には柳原夫妻の墓が存在しているようだ。『鳥取県の地名』にも、「明和七年（一七七〇）には京都の柳原家から同家祖先の墓があるという由緒により、同家略家譜が寄付され、文化六年（一八〇九）の量光の遠忌にあたっては柳原家より代拝使者が下向している（因幡年表）」という記述がある。無駄安留記に掲載されている絵の中では、柳原寺の後方の山に「柳原卿古墳」と書かれており、もしかするとその辺りに墓所があるのかもしれない。しかし、今回調査した中ではそのような墓所は発見することができなかった。

実際に訪れてみると、柳原寺の場所には現在観音堂が建てられている。道に面した石垣の上にあり、後ろの山には木が生い茂っており、ひっそりと建っていた。

（安道 詩織）



土堂薬師

土堂薬師は、現在その名を学行院という。学行院は、鳥取市国府町松尾にあり、真言宗醍醐派に属している。ここには国の重要文化財である本尊薬師如来像、両脇侍の日光・月光菩薩像、そして、吉祥天立像が安置されている。

まず、無駄安留記の記述を見ることにする。

吉埜邑 土堂薬師 今ハ小堂鐘ばかり残る。縁起ハ拾遺書詳なり。往古ハ伽藍なりし由。木仏破壊したる数多納る。前に積たる石ハ宝経塔五りんの崩なり。是国峯の路にてこゝより宇倍の越して山谷の嶮難を経て彼荒金山上に到る。依て吉埜と称ス。

この記述から、当時の土堂薬師の様子として小堂と鐘だけが残っていて、昔は伽藍であったため仏像がたくさんあったが破壊され、宝篋印塔・五輪石も崩れてしまっているということがわかる。

土堂薬師について『因幡志』には、建立当時からある「朝日さし夕日輝く萩の柱のその下に金千両朱千盃漆千杯縄千束」との置文があったという口伝があり、それを聞き伝えていた世の盗賊どもが金を盗ろうとして荒らした。天正年中、山中鹿之介が国府の甕山に在陣しているときにその郎等がこの寺のことを聞き伝えて、寺中を掘り起こし、本尊の背まで破って探したと書かれている。そして、その後慶長九年（一六〇四）に、紹慶という富農と覚行という修験者が堂を建立し本尊を安置した、そのため覚行の名をとって学行院と呼ばれるようになったという。

また、無駄安留記の絵には、次のような文章が書き付けられている。

文治五年歟、平相国清盛内室二位ノ禅尼開基而大伽藍之跡也。是再建立也。旧ハ和銅二ノ年秋当国加路住伏野氏建立。花度山光良寺ト号。国中第一ノ大梵宇。



現在の学行院





吉祥天立像
(学行院パンフレットより)



薬師三尊像
(学行院パンフレットより)

これは、「文治五年（一一八九）に平清盛の内室である二位の尼が開いた大伽藍の跡である。これは再建立したものである。その昔は和銅二年秋に加路に住んでいた伏野氏によって建立された花度山光良寺と言われる国中で一番大きなお寺であった」という意味である。

『国府町誌』によると「二位の尼は安徳天皇菩提を弔うために寺を再興し、釣鐘も寄進した。平家一門と刻み、知盛建立と彫り付けたがあるが、施主は西蓮法師である。平家一門の追善供養のためであった」とあり、後に平家一門を供養した僧侶がいたことがわかる。次に、詠まれている歌についてみることにする。

国峯のみちさえ絶えて降雪の

花に埋るゝみよしの、寺

この歌は、「国峰の路さえ途絶えてしまいうくらい降る雪のような花に埋もれている、吉野のお寺は」という意味で、春の花盛りの様子を呼んだものだということが読み取れる。花は桜の花で、奈良の吉野の桜が有名なものでそれに掛けていると考えられる。花を降る雪

のようだと修飾することで、咲き乱れる様子とその光景の美しさを表している感じを受ける。

次に、無駄安留記に描かれている絵と現在の様子を比べてみることにする。無駄安留記の絵には、お堂と釣鐘と宝篋印塔・五輪石が描かれているが、現在は、鉄筋の収蔵庫になっている。また、釣鐘は、現在なくなっていたが、宝篋印塔と五輪石は現在も残っていて、崩れて三段や四段になっているものもあった。さらに、無駄安留記に「木仏破壊したる数多納る」とあるが、現在木仏は学行院休憩所に展示されている。絵と現在の様子では変わってしまったところもあるが、実際に見に行くとかつての名残はあるように思われた。薬師三尊を見ると、建物が変わっているが歴史の重みを感じることができた。今後も、歴史的価値があるものが残ってほしいと思うことが出来る場所だった。

(石原 菜津子)



宝篋印塔と五輪石



学行院休憩所に展示されている木仏

こしきやま 甕山砦

甕山城は、国府町町屋に位置する甕山に築かれた城であるが、現在はその跡が残るだけである。甕山は、面影山・今木山とあわせて「因幡三山」といわれている、標高百十メートルの山である。

まず、無駄安留記の甕山城についての記述をみることにする。

甕山砦 山中鹿之介此山を脚だまりとして七度返して戦し址なり。
是尼子家の長臣にて幼主を守護して苦戦せし址。武田美作守を討亡したる時楯籠砦也。

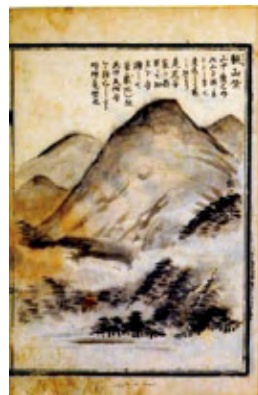
これから、山中鹿之介が甕山を拠点として戦いをしていたこと、武田美作守と戦った時に籠城していた城であったことがわかる。

『因幡志』にも「永禄元亀間山中鹿之介幸盛がこの山に城を構えて少

間在住して鳥取の武田高信と合戦したる」と同じような記述がある。これにより、無駄安留記の記述の「武田美作守」とは武田高信のことだと考えられる。

次に、甕山に在城していた山中鹿之介についてみておくことにする。
尼子家家臣であり、尼子家復興のために戦った中心人物で、永禄元亀年間（一五五八～七三）には、甕山城に在城して、天正元年（一五七三）には武田高信と戦った。この戦いは、「たのも崩れの合戦」といわれている。

これについては、無駄安留記の拾遺巻にも山中鹿之介と甕山城に関係する記述がある。それによると、「元亀三年（一五七二）の頃、尼子家家臣山中鹿之介幸盛は、当国巨濃郡浦留相山の城に籠り、国中の寺社及び民の金銀財宝を奪い取って近郊の諸城を攻め取った。そして、法美郡





甕山に城を構えた。それから京都にいたが、天正元年正月尼子晴久公を大将にして、大軍再起し僅かに十日余りで十三城を攻め落とし、武田高信を攻め従え鳥取城へ籠った」と書かれている。

無駄安留記拾遺巻には、「たのも崩れの合戦」についての記述もある。

これは、山名家と武田家の争いの中で、山中鹿之介軍が山名側について武田と戦った戦いであり、「天正元年八月一日、武田高信軍が攻めてきて戦いは始まった。武田は四五百騎で、甕山を攻めたが、容易に登ることはできず、突然城兵が打ち出してきたので、引き退くことになった。さらに法華寺今木山城主秋里佐馬允に後詰され、逃げ退いた。鹿之介軍がそれを追い討ちしようと岩倉・卯垣を過ぎ鳥取へ入ると、道は死骸の山となった。そして、高信も片息になり城へ逃げ帰った」と書かれている。これから、甕山での山中鹿之介と武田高信との戦いが壮絶なものであつ

たことを想像することができる。この合戦の内容は『稲葉民談記』にさらに詳しく記述されているが、内容も類似しており、無駄安留記は、『稲葉民談記』をもとに書いたのではないかと考えられる。

次に、無駄安留記の絵と現在の様子を比べることにする。無駄安留記の絵には、甕山は隅に描かれていて、後ろには高い山が描かれている。無駄安留記の絵には麓には何も無いように見えるが、現在、前に道路が通り、人家もあるため、昔の雰囲気とは違うように感じられた。また、地勢を考えると、美敷川と袋川に囲まれており、城を築くのに優れていた場所であつたと考えられる。現在の甕山を見ても、敵が攻め登るのは大変だつたろうと想像することができた。しかし、今回の調査ではこの絵が実際にどの場所から描かれたのか特定することはできなかった。今後も、調査を続けていく価値があると思う。

(石原 菜津子)



新^に井^い石舟

石舟古墳は新井集落から山の方へ一〇〇メートルほど向かったところにある。直径一〇メートルほどの円墳と推定され、横穴式の石室の中に凝灰岩をくり貫いた家型石棺が安置されている。六世紀末頃から七世紀末前半頃の古墳と推定されている。

この新井集落の周辺には、荒船の崩御や岡益の石堂など、平家伝承にかかわる旧跡がのこっており、そのひとつに新井石舟がある。平家伝承に関連させ、平清盛の妻である二位の尼の墓であるという伝承が残っており、無駄安留記拾遺巻や、『因幡志』にこの話が詳しくのっている。壇ノ浦で入水したといわれている安徳天皇と二位の尼だが、実は生き延びて舟で逃げる。無駄安留記には日本海を北上して鳥取の賀露に流れ着き因幡の山奥へ逃げたという説が書かれているが、『因幡志』ではまた違う説が書かれている。病弱な安徳天皇はついに因幡の国荒船で崩御なされた。そして密かに葬儀が行われ、その場所に石堂が立てられたという話である。

さて、無駄安留記における新井石舟の記述を見たい。本文として

嗚呼、悲嘆すべし星霜つもりて大破せしを視露して石船などの俗称は何人かいひけむ。或は此中にて脚を洗へば雨ふりしなど法外のふるまいなり。

とある。作者はまず、この古墳を二位の尼の古墳だと言い切っている。そして作者が二位の尼の古墳が大破し、周りからぞんざいな扱いを受けている事に対して批判的である。

次に狂歌である。

波あらし西の海にや君こりて

石の御舟に身をかくしけむ





壇ノ浦から源氏の手を逃れて各地を転々と逃げた安徳天皇と二位の尼だが、安徳天皇は崩御なされ、二位の尼も疲れ果てて今度は不安定な海上の舟ではなく、堅固な石の御舟に身を隠してしまった、という内容であると思われる。

『因幡志』における新井石舟の記述を見たい。

常に濁水を湛ゆ。泉塚と云ふ。豊年には水多く、凶年には水減す。もし、此水を攪る時は百日雨ふると言い習はして諸人崇敬す。(中略) 其墓の中水たたゆれば石舟とも又泉塚とも云ひ習はしたるなり。又傍の小さき窟は二位殿侍女の墓なるべきかといへり。

この記述によって石舟の中に水がたまつて泉塚というようになったとわかる。さらに、「この水をかき混ぜる時は百日雨降る」という言いならわしによって、どれほど土地の人が崇拜しているのが想像できる。つづけて「又傍の小さき窟は二位殿侍女の墓なるべきかといへり」とある。

この「傍の小さき窟」は、石舟が二位の尼の墓だとしても、古墳時代のこの地の有力者の墓だとしても、石舟の主の従者であったのではないかとと思われる。さらに『因幡志』には、「石舟を二位尼の墳といふも何の証無き里諺なれど国中所々平家落着の事亦少なからず。(中略)しばらく土人口碑にしたがうべきにや」と、疑問はもちつつ土地の人々の意見を尊重しようという意志がみてとれる。

無駄安留記と『因幡志』を比較してみよう。無駄安留記の「此中にて脚を洗へば雨ふりしなど法外のふるまいなり」という部分と『因幡志』の「此水を攪る時は百日雨ふる」という記述は内容が同じであると思われる。特徴的なのは無駄安留記が二位の尼に対して非常に思い入れが強いのに対して『因幡志』は冷静である点である。先ほどの記述にしても『因幡志』では「この水攪る」としている所を、無駄安留記では「脚を洗う」という表現にしている。これを見ても、無駄安留記の著者である米逸処には二位の尼に対して尊敬の念などあるように思われる。

(西尾 章太郎)



梶原橋

現在「梶原橋」という名前の橋は、旧法美郡内には見つからなかったが、明治三十三年に陸地測量部が発行した二万分の一地形図に「梶原」という地区があり、そこに橋があることが確認できた。これが無駄安留記の梶原橋であったのではないかと考えられる。ちなみに現在、地図と同じ位置にある橋は「清水橋^{すんず}」という名称である。

無駄安留記中に見られる梶原橋に関する記述は、

是平氏の残党を追討の滞陣せし時被掛也と。拾遺に悉細を記す。

二度がけか 三度かえしか知らねとも

是梶原のかけときしはし

というものであった。「是梶原のかけときしはし」と言う部分は「梶原景時」と「架けておいた橋」とが架けられている。よって、「二度がけか三度かえしかしないがこれは梶原景時が架けておいた橋だ」という意味になる。

梶原橋の由来は「拾遺に悉細を記す」とあるように無駄安留記拾遺巻には詳しく記されている。その内容は、「梶原景時が率いる軍が、平家一門が皆入水したと聞き、そのことを報告しようと鎌倉へ向かった。長門・壇ノ浦、石見を通り、稲葉にたどり着いた。そして、法美郡を通る際に川が増水したので、そこで一夜を明かした。翌日、川の水位は高かったが梯子を掛けさせて川を渡った。このことから、その橋を梶原橋と名づ





けた」というものである。景時が橋を架けたから、梶原橋という説である。

しかし『因幡志』には、それとは異なる二つの説が書かれていた。一つ目の説は、「昔平家の一門がこの谷奥に逃れてきた。そこに、梶原景時が平家を討ちに來たが、里人が平家をいたわり、ここには落人はいないと言って梶原を欺き返そうとした。そして、その山道の川に掛かっていた橋を梶原橋と呼んだ」といったものである。二つ目の説は「八上郡最勝寺の説では、浦冠者範頼が寺に隠れていたのを景時が討ちに來たとあった。実際にそのことがあったら不都合なので違うであろうが、梶原の名前は橋だけではなく、梶原山、梶原橋などもある。だが、景時がここに泊まり住んでいたことは記憶に無い。或は、同苗の一族を残しておいたのだろうか」という内容である。どちらも、景時が人を追いかけてきたため、梶原橋と名前がついたとしている。今回の調査で梶原橋についてわかったことはここまでで、これ以上は明らかにすることができなかった。実際はなぜ梶原橋なのか、梶原氏が架けたとしてもその梶原氏と景時は関係があるのか、などといった詳細は不明のままである。

また、『因幡志』には、続いて「民談記武田高信謀叛の條に山名方に法美郡には毛利・梶原ありとあるので、永祿のころ梶原氏の武士が在城していたと判断できる。長い間梶原氏は山名の幕下だったので、武田氏が原因で滅亡してしまったのだろうか。それとも、天正の乱で落去したのだろうか。未だ明らかにならない」と記述されていた。実際に『稲葉民談記』を調べてみるとこのような記述がある。ここでは梶原氏が法美郡を治めていたことが窺える。しかし、ここで登場した梶原氏は、景時と同じ一族つながりがあるのか、そうではないのかといった詳細も、今回の調査では明らかにすることはできず、未だ謎に包まれたままである。

(安道 詩織)

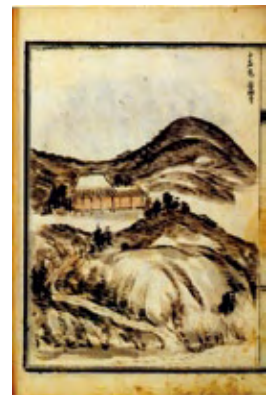


普眼寺 ふがんじ

普含寺は鳥取市国府町拾右にある寺である。山号を「玉龍山」という。天正四年（一五七六）に楠城村の山本六郎左衛門が土地を寄進し、恩志村（現岩美町）本光寺秀山利旭を迎えて開山したと伝えられている。

無駄安留記本文には「街道の右方山奥の平地にて大寺なり」と書かれている。街道とはおそらく法美往来を指すものと思われる。法美往来は鳥取城下から袋川沿いに大茅山北東の十王峠を経て岩井郡蒲生村（現岩美町）へ至る道であり、蒲生村で但馬往来に接続する。普含寺近くに位置する楠城村が安政三年（一八五六）に飛脚宿に指定されている。その街道を鳥取市内から雨滝に向かう途中の山の中腹に普含寺はある。普含寺の本尊は聖観音である。この観音は、普含寺本堂の上手にあったとされる二階堂道蘊の屋敷跡から掘り出されたとされている（『岩美郡史』）。無駄安留記の本文にも「往古二階堂入道の守本尊一寸八部の観音の像安置、是神護邑の土中より堀出す所なり」とある。

二階堂入道とは二階堂道蘊を指している。『太平記』によると二階堂道蘊は鎌倉時代、北条高時を補佐した人物である。楠正成の立て籠もった千早城攻めにも参加した幕府側の武将である。しかし幕府側、即ち北条が官軍に破れると幕府軍の主要たる武将は朝廷側に捕縛され処刑された。幕府補佐の朝敵・その最たるものとされていた二階堂道蘊もその対象の例外ではなかったが、その賢才ぶりを見出され領地を安堵されて朝廷側に仕えることとなった。だが、朝廷に仕えるようになってしばらく経ったところ、謀反の疑いありとのことで処刑されている。『岩美郡史』には「道蘊即ち因幡二降り此里ヲ擇ヒ住居セリ」と書かれている。しかし『因幡志』には「懸命の地を安堵せるとは何國のことなるにや明かならざる」と書かれている。だがその続きに「二階どう屋敷の下の段にて釋迦（長五寸ばかり）観音（長全上）」の二金像佛を堀出せしことあり。これ即ち二階どうが後室の持佛どうの迹といひつたふるなり（ルビは筆





者」と書かれていることから、二階堂道繼、もしくはその後室が因幡と関連がある、という伝承が民間に伝わっていたらしいことがわかる。また無駄安留記では観音の大きさが「一寸八部」となっているが、『因幡志』には「長五寸ばかり」と記されているのはつきりとした大きさはわからない。

狂歌は「十石の寺の鐘搗こゝろせよ 六十刻の春の入相」とある。まず十石であるが、これは拾石村と米の単位である十石をかけたものである。そして「鐘搗」であるが、本来鐘を撞く場合「撞く」を用いるが、十石にかけて「搗く」としている。また「六十刻」は時間の「刻」と米の「石」をかけている。六十刻とは中国に由来する時間の単位で、一日を百刻とし夏至の昼間を六十刻、夜を四十刻。冬至は逆に昼間を四十刻、夜を六十刻とした。旧暦で春とは一月から三月を指す。春にもかかわらず六十刻としたのは、おそらく作者は昼間の時間を六十刻だと思い込み、

昼が終わって夜が始まる時間を「春の入相」と表現したのではないだろうか。そして十石と六十刻を米に例えて、「(米が)十石なのに対して相手は六十石(刻)なんだから慎重しく鐘を撞きなさい」という意味を込めて「こゝろせよ」と夕方に鐘を撞く住職に呼びかけているようである。

現在の普含寺は開山からおおよそ百年後に山の上から現在の場所に移転している。前にあった場所と二階堂屋敷があったとされている場所は近いのだが、何か関連があるといった資料は見つからなかった。本堂も藁葺き屋根から改装され無駄安留記の絵とは違った姿となっている。しかし、長年その土地で人々の信仰を集め続けたその姿は訪れる人々を昔と変わらず迎えてくれる。

(進藤 健裕)

楠城邑 なわしろむら



楠城は国府町拾石と栃本の間にある村で、川と道路を挟んで南西には拾石村が位置している。この村については、無駄安留記の中には記述がなく、絵だけが描かれている。そのため、無駄安留記だけではどのような村であったのか知ることはできなかった。そこでまず、無駄安留記の絵と現在の様子を比べてみることにする。無駄安留記の絵を見ると、山に囲まれた村であることがわかる。そして、川も流れているので、美しい景観であることが窺える。現在は、道路や川が工事で整備されていて変わっていたが、実際に見てみると、基本的な景観はほぼ一致していた。今後も美しい景観が残ってほしいと思う。しかし、一つ疑問に思ったのは、後ろに描かれている扇峯すなわち扇ノ山である。私たちが現地調査に行ったときは、写真でもわかるように扇ノ山は見えなかった。このことから調査に行つて写真を撮った場所が無駄安留記の絵が描かれた場所と異なるのか、それとも、作者が意図的に扇ノ山を構図の中に入れたのかという二つのことが考えられるが、今回の調査では明らかにすることができなかった。

楠城がどのような村であったのか調べるためほかの文献を探すと、『因幡志』、『鳥取県の地名』、『国府町誌』に記述が見られた。まず、『因幡志』には、楠氏

の城が二ヶ所あり、この里を楠城というのもその由縁であることと、村の下の方にある五輪の墓二十基余りも楠氏代々の墳墓だということが言い伝えられていると記述されている。この記述から、楠城には楠氏に関係する言い伝えがあるということがわかる。

次に、楠城という表記について考えることにする。『因幡志』で、楠氏ゆかりの地であるから村を楠城というが、その前はどのような表記していたのかというと、『鳥取県の地名』の中に「正保期（一六四四～四八）作成と推定される因幡国絵図（県立博物館蔵）には苗代村とみえるが、元禄一四年（一七〇一）に楠城村に改められた（変地其外相改目録）（県立博物館蔵）」とある。このことから、楠城村はもと「苗代村」と表記されていたとわかる。この事について『国府町誌』に少し詳しく書かれていて、「米の収穫高から苗代が生まれ、楠氏ゆかりの地から楠城が生まれている」とある。しかし、「苗代以前にすでに楠城があったとの考証もある」と記述があることから、元の表記がどちらであったのか今回の調査ではわからなかった。

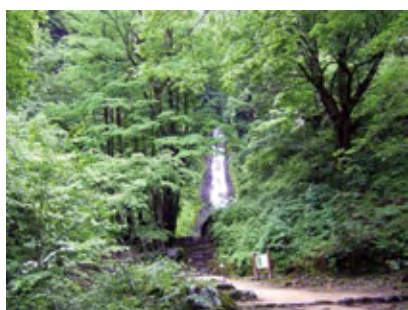
楠城は、無駄安留記では記述がなくて、作者はどうして絵だけ残したのだろうかと思ったが、作者が訪れた時にその景観を見て美しく感じ、その景観の美しさを描きとめておこうと思ったのではないかと思われる。

（石原 菜津子）



雨飛泉

鳥取市国府町にある日本の滝百選にも選ばれている雨滝。夏の鳥取市を代表する自然景勝地である。まずは、無駄安留記本文を見たい。「老樹蒼翠の中を過て往ば常に雲霧不断夕日映じて傘のごとき虹をなせり。巉岩百丈の上より玉泉雨の如く漲落る。滝の頭総て岩峻て水際に路ありて裏を見らる。」ここで「雲霧不断」を「水しぶきが絶えない様子」と訳すと意味がつかみやすく、その神秘的な情景を想像するに易いと思う。ただ、問題なのは傘というのは通常雨が降る前に太陽の周りに現れる円をさすものである。しかし、ここでは「傘のごとき虹」となっている。そして最後に「水際に道ありて裏を見らる」とあるが、現在の雨滝では確認できない。



すさまじきたきの音には山狙も
梢にはせる肝やつぶさむ

解釈としては「猿もびつくりするような、すさまじい滝の音である」となる。「梢にはせる」がわかりにくいのが、これは『今昔物語』（五卷二五話）の「亀、為猿被謀語（亀、猿の為にたばかられたること）」という話を用いた狂歌である。

この話の内容としては、亀の夫婦の妻

に子供ができたが、妻はお腹の病気を患っていて、その病気を治すには猿の肝がよく効くということ。そこで、夫が猿の肝を探しに行く。そして岸にいた猿を騙して背中に乗せ、海へ連れ込もうとする。しかし、その時亀は猿に「実は猿の肝が欲しいから騙した」と言ってしまう、怒った猿は「猿の肝は体の中にあるのではなく、木の梢にはしてあって自分の肝も他の猿の肝もそこにある」と騙し、亀は信じてしまう。そして亀は猿を岸に降ろし、猿は逃げ、亀は泣く泣く海に帰っていったという話である。この話には様々なパターンがあるようで亀の役がクラゲやナマコになっている話もあるが、総てこの『今昔物語』が元となって語られていったものである。いづれにしても重要なのは猿が自分の肝は梢に干してあると騙して逃げるという点で、どの話でも見受けられる。

無駄安留記の絵と現在の雨滝はかなり違った様子となっている。今回の調査では四つの違いに焦点をあてて考察した。

第一に、木の数が違う。これは江戸時代に燃料に薪を使用し、江戸時代では雨滝村の産物として炭があるため、雨滝集落の人々が切って使っ



ていたと思われる。鳥取城下では雨滝村産の白炭が良質炭だと言われていた。

第二に、雨滝は、昔から修行・信仰の場として祭られていた。また不動明王も祭っている。調査に行ってみると彫刻が彫られており、昭和二十六年につくられていた。しかし、昔は右の石壁に彫刻が彫ってあった。『因幡志』には「右の方 石壁に不動の像を彫刻せり 直下にカツラの老樹あり」とあり、さらに無駄安留記絵中にも『国府町誌』でも確認できるが、滝に打たれて修行・信仰する人々のための籠り堂が二つあった。今では滝行をする人もいないせいにか、この二つの籠り堂はない。

第三に、雨滝で有名なものの一つとしてカツラの老樹がある。『因幡志』・『稲葉民談記』共に桂の老樹の記述があるが、無駄安留記にカツラの老樹の記述は見られない。だが、右ページ中央付近にある木は他の木と違いはつきりしたタッチで描かれ、周囲の木とは違うことを強調されているともとれる。しかし、カツラの老樹の特徴として、中心部が腐って空洞になり、周りから多数の枝が伸びる。『因幡志』でも「一株十二本に分かれたり 周囲五丈あまり うっそうとして一大森林の観あり」と記述されている。無駄安留記絵中の絵はこの様な様子とは全く違う。第四に、絵と現在では滝の水量が違う。その一因として『因幡志』には「享保己酉（享保十四年 一七二九年）の洪水に彼のちようし口の岩

石破れ落ちてより水勢大いに折けたりといふ」とある。しかし、無駄安留記の成立した年は安政五年（一八五八）であり、年代が食い違ってしまう。よって、この絵が洪水以前の絵を模写、あるいは絵全体のインパクトを考慮して描いた可能性もある。洪水以前の絵が存在していたかは不明である。

以上の点を踏まえると、現在と絵と合致する点は見当たらない。さらに細部を見ていくと筆者が実際に現地へ赴いて描写した絵かさえ疑えてくる。しかし、無駄安留記成立から約一五〇年の間に変化したと考えることもできるので、一つの結論に至るのは難しいと考える。

【参考文献】

- 『今昔物語』
- 『国府町誌』
- 『稲葉民談記』
- 『因幡志』

（西尾 章太郎）



風宮祠

「風宮神社」は全国各地に存在し、鳥取県では倉吉市に風宮神社がもう一つある。「風宮」というのは元々伊勢にある豊受大神宮の別宮の一つである風宮神社が由来であると考えられる。元来風社と称し延喜式神名帳にもその名前は確認できないが、級長津彦命を祀る農耕に都合のよい風雨をもたらす神社とされていた。弘安四年（一二八一）の元寇において風宮で祈禱を行い、その結果神風がおこり蒙古軍を撃退したとされ

神社としての格が上がった。さらに、風雨の神として祀られていたが元寇においての神威を発揮したとして国家の一大事において国を加護してもらえんという信仰が加わっていく。

しかし、ここで問題なのは無駄安留記においてこの風宮神社の祭神が「少名彦名命」と書かれている点である。風宮であるならばその祭神は級長津彦命であるべきである。もちろん『鳥取県神社誌』でも風宮神社の祭神は級長津彦命となっている。ではなぜ少名彦名命が祭神とされているであろうか。少名彦名命とは大国主と共に葦原中国を創った神とされ、少名彦名命は農耕や医療の神とされる。また、医療に関連して温泉の神ともされ、有名な温泉などでも少名彦名命が開いたとされている。一方、級長津彦命は農耕の神ともされるが、「風」と同音の「風邪」を治す神ともされている。そして『鳥取県神社誌』によるとこの風宮神社は「往古より風邪の神として緒人の信仰篤く疫病流行に際しては近郊よりの賽者踵を接す」とある。級長津彦命と少名彦名命の農耕・疫病の神としての共通項は見逃せない。しかし、無駄安留記で祭神が「少名彦名命」と書かれている確かな理由は謎である。『鳥取県神社誌』の記述によると「元文二年正月六日本殿焼失せるため沿革を知る能はず」とあり、



創立年代も分からない状態である。

無駄安留記本文は「法美郡余戸村風宮祠。衆人信仰す。祭神少名彦名神 石磴老杉中に鎮座」とあるが、この「石磴」は無駄安留記の絵と対比してみると、石段と解してまず間違いないであろう。無駄安留記本文はさらに続いて「同古墳。社より一町余奥なり。明治始、村民此処にて松根を掘とて、古き塚穴の蓋に当たれり。内を窺へば大白骨大口を開きて座せり。凡七尺許の大男の骸にて、武具ハ朽たれと大劔在り。是何世の人ならん。想ふに両刃の劔ハ蓋上代の物也。」「空白」始て「空白」作りしより片刃と為りぬ。然らば此時代より前の人なり。上代の武臣たること必せり。此骸の腹とおぼしき処に掌に余る程の囊の物ありて和らかなり。何物とも不知。奇なりと公に訴へ又本の如に瘞埋けり」とある。『鳥取県の地名』では、風宮神社のこの古墳について、詳細は不明とされている。しかし、鳥取市教育委員会の津ノ井宇称遺跡・津ノ井四十号古墳発掘調の報告には、風宮神社より北北西に三五〇メートルほど進んだ所に津ノ井四十号古墳があり、そこから中世の墓と思われる三基を確認、その内一基からは古銭の出土を見た、とある。このことから、この風宮神社付近に現在白骨は確認されていないが、中世の武士の墓などあっても何らかしくはないのではないだろうかと考えられる。ただし、無駄安留記の白骨の場合は上代様式の両刃の劔とともに埋められていたことが不審である。

この風宮神社の神紋と思われるものは二つある。この二つの神紋は花菱と五七桐の紋様である。花菱は伊勢神宮としての神紋でもあり豊受大神宮の神紋でもあり、もちろんその別宮である風宮もこの花菱を神紋と

しているため、この風宮神社の神紋に多少形は違えども、花菱が使われるのは妥当だと思われる。そして五七桐であるが、桐は中国の故事から鳳凰が桐の木にとまり竹の実を食べて聖王の出現の予言を鳴くというものから、皇室とのつながりを意味する紋章となった。そして桐紋は皇室から將軍家に下賜され、皇室の権威にあやかるとためか、全国に広まった。風宮神社は、前記のように国を加護する神社として信仰されていたため、桐紋を使っているのではないかと思う。

【参考資料】

- 三浦佑之『口語訳 古事記（完全版）』文藝春秋、二〇〇二。
- 丹波基二『神紋』秋田書店、一九七四。
- 鳥取県神職会（編）『鳥取県神社誌 1』鳥取県立図書館、一九九七（一九三四）。
- 鳥取市教育委員会（編）『津ノ井宇称遺跡・津ノ井四十号古墳』鳥取県教育委員会、一九八四。

伊勢神宮公式HP <http://www.isejingu.or.jp/>

（西尾 章太郎）

多門寺毘沙門天王



現在の毘沙門堂。毘沙門天などの木像が安置されている。

多聞寺毘沙門天について、無駄安留記の本文には「多門寺 毘沙門天王 毎年三月会式」とあり、毎年三月に会式を行うと書かれている。『鳥取県の地名』によると、文化二年（一八一五）以降毎年三月に五穀成就を祈って行われていたようだ。また『因幡志』によると、一〇月にも

木像が石窟から出された日として会式を行っている。

無駄安留記の狂歌には、「つかひたまふ百足より猶会式には人脚多ふきびしやもむ参り」とあり、その意味は「祭りの日には毘沙門参りのために」毘沙門天が使いとされている百足より、もっと祭りの日には多くの人（参詣者）の足が集まってくる」となる。面影山は因幡三山のひとつであり、多くの人が会式に参詣したのは、それほど毘沙門天が人々に信仰されていたからだろう。

『因幡志』によると、多聞寺は宝永三年（一七〇六）に国主池田家の家臣荒尾主計の志願によって建てられ、鳥取景福寺の末山として曹洞一派の禅林となった。毘沙門天がこの多聞寺に安置されるに至った経緯は『因幡志』と毘沙門碑によると次のようになる。（なお、多聞寺、毘沙門天については、地元在住の田中博氏に重要な情報をいただいた。毘沙門碑の碑文もその一つで、これは安藤文雄氏が翻字されたものだということである）。

長保年中（九九九～一〇〇四）、僧の恵心によって杉の木で作られた毘沙門天は正蓮寺に安置された。延元二年（一三三七）、兵火で正蓮寺は焼けてしまったが、木像は寺の後ろの石窟に隠して難を逃れた。年号は不明だが、その後小堂を建て安置した。元龜年中（一五七〇～一五七二）兵火で再び小堂が焼けてしまうが、堂の南の山伏の真道という者の坊に移して難を逃れた。そして一七〇六年多聞寺を興し、木像を安置するに至る。

その後は明治維新によって多聞寺は廃寺となってしまいが、里正の井関重と戸長の石河源五が明治政府に嘆願して毘沙門堂を建てようとした。真道の子孫に祀らせるため土地を買い取って与え、毘沙門堂に木像



絵① 多門寺毘沙門天 上に描かれた建物を①、中央左に描かれた建物を②とする。②は①に対して、地図上では北にあたる。

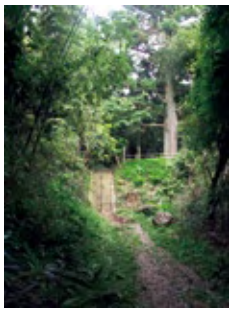
を安置させた。明治二十九年（一八九六）、子孫の井関重雄と石河鉄蔵が当時の毘沙門堂の北にあたる多聞寺のあった場所に、土地を広げて鳥尾小弥太が撰文した毘沙門碑を建て、多聞園と名付けた。

これらの歴史をもとにして無駄安留記の絵①を解釈してみる。最初に指摘しておくが、実際に現地を訪れてみると絵①の上に描かれている建物の場所①と、多聞寺があったと思われる現在の毘沙門碑の場所②の位置関係はもっと離れており、他に建物の跡はなかった。これら二つをなぜ近い位置関係に描いたのかは分からない。

絵の題が「多聞寺毘沙門天」であること、さらに建物の造りから、絵①の上に見える建物は多聞寺を描いたものと思われる。しかし『因幡志』と毘沙門碑の内容を調べてみると間違いが見られる。まず毘沙門碑の「碑を堂の北、古寺の跡に建て」（「碑」とは毘沙門碑、「堂」とは毘沙門堂、「古寺の跡」とは多聞寺の跡）という記述から、多聞寺は作者が描いた



多聞園 絵①の⑥にあたると考えられる。
毘沙門碑がある。



毘沙門の階段 絵①の④に続く階段。階段上には何かの建物跡が残り、県木「多聞杉」がある。

場所①ではなく、北にあたる絵の左の建物の場所②にあったことがわかる。毘沙門碑は現在、②の場所にあるので、多聞寺は②の場所にあった。また、建物の造りによる判断を無視し、絵①の左の建物を多聞寺と解釈すると、上に描かれた建物は何か。後に①の場所には毘沙門堂が建てられたが、それは多聞寺が明治維新によって廃寺になった後なので、二つの建物が同じ絵に描かれることはない。よって①の場所に描かれているのは、毘沙門堂ではなく他の建物ということになる。しかし、他に何か建てられていたという記述は見つからなかった。このようにこの絵には不明な点が多い。

以上、多聞寺毘沙門天にはまだ不明な点も多いことから、今後も調査していく必要がある。現在は山下に新しい毘沙門堂が建てられ、多聞園には毘沙門碑が残っているだけだ。毘沙門天は県の文化財に指定されている。

（森中 孝佑）



中央が毘沙門天。幾度と兵火にあったためか保存状態はあまり良くない。

いがみぬ 意上奴神社

意上奴神社は鳥取市の香取集落域南西に位置する神社である。神社は森の奥に鎮座しており、神社を取り囲む社叢地は昭和五年四月八日に香取県自然環境保全地域に指定されている。また意上奴神社は文徳天皇・文寿二年（八五三年）に正六位上を授けられている。

まず無駄安留記の本文を検証したい。無駄安留記には、

是幽谷森々たる老樹の中に鎮座陰々として容易に入りがたし。溪水の右の高みに社頭。真に怖しき幽谷なり。古来妖怪有とて容易に深入りする者なし。

と書かれている。まず、前半はその意味の通り深い森の中に鎮座する意上奴神社を指している。二文目からは鎮座する様子が書かれているが、社殿に行くには左手に小川を望みながら石段を上らなければならない。また、木々が鬱蒼としていて昼間でも薄暗い。

また、無駄安留記には「角文字のいがみの森に風荒れて 鬼蔦までもきばをならせり」という歌が詠まれている。歌の解釈だが、まず最初の「角文字」。これはおそらく「いがむ」の「い」に掛けた序詞ではないかと思われる。「角文字」は本来「牛の角文字」として「い」と「ひ」に掛かる序詞に使用され、その用例のほとんどが恋文に使用されるが、今回は例外とみていいと思われる。次に「いがみ」だが、古語で「いがむ」は「獣が怒って、噛み付こうとする様子。歯をむき出しにして、怒り吼える」といった意味がある。そして「いがみぬ」は、「いがむ」＋完了の助動詞「ぬ」で「いがみぬ」となった可能性がある。すると「いがみぬ」神社の意味は「獣が怒って噛み付こうとした」神社となり、いかにも怖ろしい雰囲気が出る。ここからおそらく妖怪などのイメージが定着してしまい、それを聞いた作者が「いがみぬ神社」の「いがみ」を使って「いがみの森」という表現をしたと考えられるだろう。

次に鬼蔦とは神紋の一種だが、この後「きばをならせり」とくる。そのため「鬼」を出



すことでよりおどろおどろしきを出す表現となっている。またここで最初の「角文字」の「角」から角と牙と鬼が生きてきて、この歌全体がいかに何かしら妖怪の出そうな森である、ということを強調しているように思われる。

次に意上奴神社の由来について考察してみた。なぜ「いがみぬ」という読み方をするのか。「延喜式」神名帳にのる法美郡九座のうち「いがむ神社」が現当社に比定される。つまりもとは「いがみぬ」ではなく「いがむ」神社なのである。

意上奴神社の「意(い)」であるが、これは古代表音にすると「於(お)」という音になる。これでは「おかみむ」神社となるが、『因幡志』には「意上神社」として記載されている。これを和音に変換すると「おかみ神社」となる。では「おかみ」とはなんなのか。

中国の最古の部首別漢字字典である『説文解字』に「おかみ、即ち竜也」とある。つまり「おかみ」とは龍を指す言葉である。龍といえば古代から雨・水の神として信仰がある神である。『万葉集』にある「吾が岡のおかみに言いて降らしめし雪の摧けしそこに散りけむ」という歌に残る「おかみ」も同じ意味で、この歌は、「私のいる(大岡の)水の神に命じて降らせた雪のかけらがそちらにこぼれ散ったのでしよう」という訳になる。原文中にある「おかみ」が「水の神」と訳されている。

龍神信仰の名残は資料『鳥取県の地名』からも読み取れる。そこには「寛政六年(一七九四年)には雨乞の祈禱を命じられている」とあるまた意上奴神社の入り口には、文政年間(一八一八～一八三〇)の法美郡全図(鳥取県立図書館所

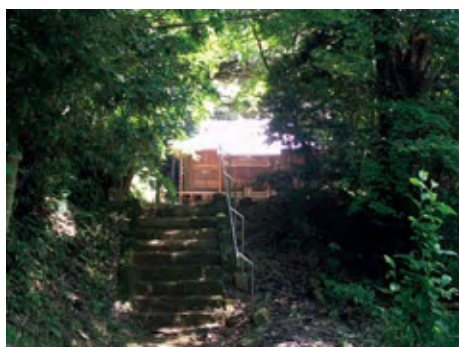


蔵)に描かれているとされている灌漑用溜池が残っており、どちらからも水に関係する神が祭られていたらしいことが伺える。神社の名に「おかみ」とつけなかった理由は二つ考えられる。まず神の名を直接表記するのは恐れ多いとして字を変えて表記した。もう一つは「おかみ」という字は、本来表示したように表記されることが多いためである。しかしどちらにしろ龍神信仰が見え隠れするのには間違いないと言えるだろう。

無駄安留記の絵には神社本殿は描かれておらず、本殿がある森を遠くから描いた絵が描かれている。現在と比較するとその景観はほとんど変わっていない。ただ本殿を見る限り何度か補修されたような痕跡が残っており、純粹に無駄安留記が書かれた当時と神社自体を比較することは出来なかった。だが、一度神社の神域に足を踏み入れると空気が一瞬にして変わるのわかる。その意上奴神社、そしてその周辺の持つ独特の雰囲気は無駄安留記が書かれた当時も今も変わらず、訪れる人を何か萎縮させるような自然の力を感じさせる。

(進藤 健裕)





三谷山福田寺

福田寺は、旧美歎水源地で知られる国府町美歎村に位置する無住の寺である。美歎村には美歎神社があるが、そのやや南東に福田寺がある。福田寺は人目につかない奥地にあり、しかも道案内の看板もなく、行き着くまでが困難であった。周囲は木々に囲まれ、肅々たる雰囲気を感じている。

絵では観音堂へつづく石段の右端に「坊」という建物がある。石段は今も舗装されて残っているが、建物はなくなっている。

福田寺には六体の仏像を保管している観音堂がある。『鳥取県の地名』によれば、観音堂は弘仁二年（八一二）に建てられたと伝えられている。無駄安留記の観音堂の絵図では、安置されている六体の仏像がうつすら描かれ、それら六体の仏像の内の一体、如意輪観音像にまつわる説話が記されている。以下が原文である。

往古ハ百町之境内ナリシ由。中古ノ乱逆ニ衰廢シ時、彼本尊ヲ三谷川辺ノ柳ノ株ニ藏ス。後年此柳川ニ横倒ル。村民是ヲ伐。株ヨリ芽ヲ萌シ花サク。雀群リ其花ヲ啄ム。数日、土人其株ヲ見レバ観音像依然ト現在。

現代語にすると次のようになる。昔は百町の境内だったため、中古の乱逆で寺が衰廢してしまった時、如意輪観音像を三谷川辺りにある柳の株に隠した。それから数年の後、川に横倒れている柳を村民が切った。すると、株から芽が出て花が咲いた。雀が群がって何日もその花を啄ば



むので、村民が柳の株を見てみると、そこから観音像が発見された。

『因幡志』にも同じ内容の説話が記されている。それによると、以上の話から福田寺の如意輪観音像は雀観音、または花観音と呼ばれるようになったようだ。

そこで、今回は無駄安留記に記されている如意輪観音像の台座の刻銘と、雀観音の伝承についての狂歌について考えてみた。

まず、如意輪観音像の台座の刻銘について無駄安留記では次のように記している。

因州法美郡 三姫村 井垣八左エ門 願主 水禮源雲

『因幡志』によると井垣八左エ門は村の住人である。願主は神仏に願を立てる人、という意味である。

刻銘の中で不可解なのは、「三姫村」という村名である。この台座に記された三姫村とは、現在の美敷村を指している。美敷村は、元禄十四年（一七〇一）に「三谷」から「美敷」の表記に改められた（『鳥取県の地名』）。しかし、なぜ村の名前が三姫から三谷へ変わったのか、音が「ひめ」から「たに」に変わったのか、それとも三姫村の「姫」という漢字は何らかの当て字として使われたのか、詳細がわからず不明となっている。

そもそも三姫村の名称の由来自体も明確でない。『因幡志』では、この地域にある姫塚古墳から名前を取ったのかもしれない、と推測してい

る。『因幡志』の説明を引用すると、「姫塚古墳は円墳・方墳等の形態を持たず、玄室・羨道・石室等の条項が見当たらず、古墳というよりむしろ一時的に亡骸を安置する祭壇とも見れる」とある。形態からして姫塚古墳は普通の古墳とは異質のようである。だが、この姫塚古墳の名前の起源もまた定かでない。『国府町誌』で唱えられている諸説の一つには、逆に姫塚の方が三姫村から名前を拝借したのではないか、との意見もある。このように、三姫村に関しては子細が謎に包まれている。

次に、無駄安留記の著者は雀観音の伝承にもとづいた狂歌を詠んでいる。

むら雀柳の花を啄より

いと有難き跡は垂けり

現代語訳は、むら雀が柳の木から芽吹いた花を啄んだことにより、とても有難い仏像が見つかった、となる。最後の「跡は垂けり」とは、本地垂迹のことである。本地垂迹とは、仏が人々を救うため神の姿になって現れるという意味であるが、ここでは仏像が出現したということを表している。その出現が本地垂迹を意味する言葉で表現されていることから、福田寺の如意輪観音がどれほど尊ばれていたかわかるだろう。

（西住 彩）

腰折石尊

腰折地蔵は福田寺と同じく、国府町美敷村にある石地蔵である。福田寺へ向かう途中で拝むことのできる地蔵だ。腰が二つに折れていることから、その名がついたと言われている。『国府町誌』によれば、地蔵が造られた年代は明らかでない。

現在、腰折地蔵は小さな祠の中に祀られており、木の根元に孕^{はら}まれる形で佇んでいる。『鳥取県伝説集』では、地蔵を挟む木はタモの老木だ

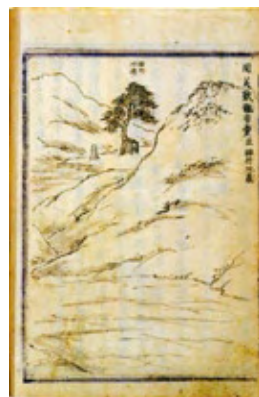


と述べている。

今回私達が調査で訪れた際には、ちょうど地元の方が祠の掃除をされていた。腰折地蔵は今もなお、丁寧に扱われていることがよくわかった。無駄安留記では腰折地蔵に関してこのように記されている。

同右ノ谷奥ニ腰折石尊 樹ノ孕ミトナリテ安ス。何ノ世ヨリカ腰疾
疝氣ノ人祈而験^{シル}多シ。

現代語に訳すと、村の右の谷の奥に腰折地蔵があり、木に孕まれて安置されている、いつ頃からか腰痛・疝氣を患っている人が祈ると効果が表れるようになった、となる。腰折地蔵の祠の側にある案内看板にも、「この地蔵に祈願すれば足腰の痛みがたちどころに治るといわれており、旅人の無事を祈って建てられたのではないかとわれています」とある。「旅人の無事を祈って」とあるが、腰折地蔵は昔は道中に位置していたらしい。『国府町誌』には村の古老の言葉として、次のように書かれている。



現在は（腰折地蔵は）山の中であるが以前は因幡山を通って京へ行く重要な道であり、高岡や糸谷へぬける分岐点でもあった。

このことから、腰折地蔵は道を行き来する人々を癒す存在として祀られていたと推測できる。交通機関が発達していなかった頃は、移動手段も徒歩がほとんどであったため、遠出する旅人の肉体的な苦労は計り知れないだろう。

無駄安留記の著者は腰折地蔵の狂歌を詠んでいる。

世を救う誓ひにこりし石仏
昔かたぎの内に籠りて

「こり」は、固まって石仏になったという意味の凝ると、物事に熱中するという意味の凝るとで二重の意味があると思われる。また、「誓ひ」は一般的によく使われる誓約の意味ではなく、この場合は「仏が衆生を救おうと立てた誓願」（『岩波古語辞典』）だと考えられる。また「かたぎ」は、気質の気持ちと堅木がかけられていると捉えられる。以上をふまえて解釈すると、世の中を救うための誓いに没頭する地蔵は、昔からの気持ちを持ち続けて堅木の内に籠っている、となる。

今と昔で社会や環境は変化したが、腰折地蔵は変わらず人々を見守る存在としてあり続けているのだろう。

（西住 彩）

法花寺・国分金光明寺址

国分寺は正式には金光明四天王護国之寺といい、国分尼寺を法華滅罪之寺という。国分寺・国分尼寺は聖武天皇が国を守るために天平一三年（七四二）に全国に建てた寺院で、因幡では国府町国分寺村の一角がその寺域に当たる。寺域に細男神社という神社があるが、神仏習合により併存したものなのか、国分寺が衰退した後神社が建てられたのかは定かでない。

まず、法華寺の無駄安留記の本文には、

国分禪寺。絵に描かれた扁額と同じだと考えられる扁額がある。



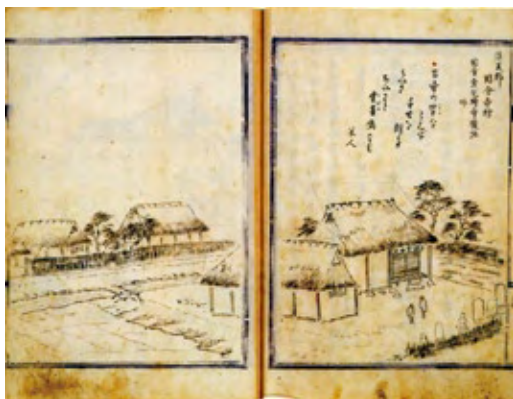
大欄若ナリ。境内広大領知四百町トアリ。当村福田某、彼寺ノ礎ヲ手水鉢ニ而取持ス。
人皇 聖武帝天平十三年 十一月、天下ノ諸国ニ詔シテ国別ニ国分金光明寺法花寺ヲ造ラシム。
孝謙帝諸寺墾田ノ地ヲ定ラル。
礎多少鳥取常忍寺ニ送ルト云。彼ノ寺本堂ノ礎ニセシヤ。今明治甲戌七年迄凡一千百二十年計之古礎也。

とある。現代語訳すると、「大きな寺

である。法華寺の境内は広大で、寺領は四百町がある。法華寺村の福田某という人が法花寺の礎石を手水鉢にして持っている。聖武天皇が天平一三年十一月に天下諸国に詔を出して国別に国分金光明寺と国分尼寺の法花寺を造らせた。孝謙天皇は諸寺の墾田の場所を定めた。法花寺の礎の礎石をいくつか鳥取常忍寺に移動したという。常忍寺の本堂の礎石にしたのだろうか。今明治甲戌七年まで、およそ一二〇年ばかりの古礎である」となる。現在では法花寺の礎石は元の場所に戻されたと書かれた看板が立っている。また法花寺の礎石は保護文化財に指定されている。

国分寺についての本文には、

国分寺村国分金光明寺址
本尊薬師如来座像。丈三尺計。古仏。



法花寺同時ノ草創。大梵宇ナリシ由。墾田四百町アリシ由也。今僅ニ草庵ヲ建ル。尼寺ナリ。往古ノ残ルハ堂下ニ五輪ノ碎経塔ノ石磨滅セル物而已。額面ハ「国分寺」清源寂譚書。

とある。現代語訳すると、「国分寺村にある国分金光明寺址。本尊は薬師如来座像で、一丈三尺ばかりの古い仏像である。法花寺と同じ時に造り始められた。以前は大きな寺であったという。墾田が四百町あったという。今はわずかに粗末な庵が建っている。尼寺である。昔のもので残っているのは五輪の塔のくだけと宝篋印塔の磨滅したものがあるだけである。草庵にかかげられている額面には『「国分寺」清源寂譚書』とある」となる。当時でもすでに創建時の国分寺を見ることはできず、代わりに小さな庵が建てられていて、尼が住職としておられたようだ。

本文にある歌を見ていく。まず法花寺には「茂りあいし昔の園は荒れ果ててはつかに残る法の花寺」とあり、意味は「昔いろんな木々が生い茂っていた庭は荒れ果ててしまつて、法花寺の跡はわずかしか残っていない。」となる。続いて国分寺には「黄金光る寺田の跡は今もなを昔の色に咲る菜の花」とあり、意味は「黄金色に光っていた寺院所有の田は今でも昔の黄金色に菜の花が咲いている」となる。作者は国分寺の周りの田が昔は米で黄金色になっていたと聞いたが、訪れたときには、米ではなく田に菜の花が咲いていてそれによって黄金色になっていたようだ。また黄金色に光るとは、金光明寺の金光明を意識している。これらの歌には時間の流れを悲しんでいる感情が表れている。国分寺と法花寺の保存状態が悪いことを悲しんだからだろう。今でも因幡国分寺跡は、山陰道で唯一史跡に指定されていない国分寺跡である。

無駄安留記の絵に記されている歌には「古寺の昔をとえば千世を経て

ちいさちいさと雲雀鳴なり」とあり、その意味は「その古い寺の昔に思いをめぐらすと、長い時が経って、小さくなった小さくなったとヒバリが鳴いている」となる。作者がここに来たとき、国分寺は無くなり小さい寺に建て替えられていたので、ヒバリの鳴き声が小さい小さいと聞こえるほど残念だったようだ。

絵に描かれている国分禅寺と現在の国分禅寺を比較すると、作者が訪れた時と同じ場所に建っている。建物自体は建て替えられているので少し違うが、国分寺と書いてある扁額も当時と変わっていない。

(森中 孝佑)



国分禅寺にある墓石。絵と同じ位置に並べられていた。



法華寺の礎石。民家の並ぶ山下にひっそりとあるが、道案内の看板が出ているので見つけやすい。



● 第1回調査

2007年6月1日(金)

【調査地】

雨滝、拾石普含寺、
楠城村、学行院、荒
船子守権現、崩御の
宮、甌山ほか

● 第2回調査

2007年8月7日(火)

【調査地】

立川稲荷神社、稲葉
神社、滝山耕月寺、
百合柳原寺ほか



調査の記録

● 第3回調査

2007年8月9日(木)

【調査地】

へタネ阪、宇倍神社、
美歎腰折地蔵、福田
寺、国分寺、岡益石
堂、梶原橋ほか

● 第4回調査

2007年11月3日(土)

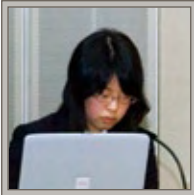
【調査地】

正蓮寺多聞寺・毘沙
門堂、余戸風宮、意
上奴神社、新井石舟
ほか

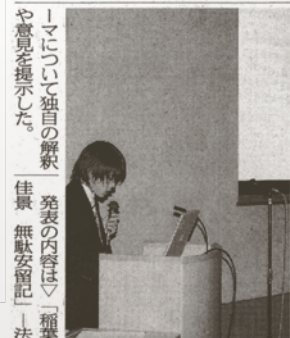


地域文化調査発表会

【開催日】 2008年1月25日(土)
【場所】 鳥取県立県民文化会館第1会議室



鳥大生、独自の
解釈を提示
地域文化調査を発表
鳥取大学地域学部地域
文化学科の学生が、研究
成果を報告する「地域文
化調査発表会」が二十六
日、鳥取市尚徳町の県民
文化会館で開かれ、歴史
や町づくりなど五つのテ
ーマについて独自の解釈
や意見を提示した。



研究の成果を報告する
学生
美郷▽因幡のシロウサギ
神話、東郷の羽衣伝説、
そして湖山長者▽鳥取に
おける国際交流と教育▽
八頭郡三町の振興策▽倉
吉市打吹地区の文化によ
るまちづくりの五つ、
このうち池野まゆ美さ
ら十二人が調べた「因
幡のシロウサギ神話、東
郷の羽衣伝説、そして湖
山長者」では、学生らが
「シロウサギは九州、ワ
ニは畿内の勢力を表し、
九州と畿内の争いを大國
主命が仲介した」などと
見解を述べた。
また、太陽を招き返し
たという伝説のある湖山
長者を、東アジア文化の
中にある太陽神との関係
で論じるなど、広い視野
に立った分析を展開し
た。

日本海新聞 2008年1月28日

